

無名夜行

Proof of Alice's Existence

——『異界』。

ここではないいずこか、此岸^{しがん}に対する彼岸^{ひがん}、伝承の土地
におとぎの国、もしくは、いくつも存在し得るといわれる
並行世界。

それらが「発見」されたのはそう最近のことではない。
昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、それが
『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人間の
間では常識とされていた。

だが、『異界』が我々を招くことはあれど、『異界』に対
してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれて
いた。

そのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが
我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近い『異
界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々

は、『異界』の探査を開始した。

もちろん『異界』では何が起こるかわからない。向こう
側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言いい切れない。故
に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の
執行を待つ死刑囚Xであった。

彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェク
トへの参加を承諾した。その心理は私にはわからないが、
Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。

寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜
航』する。Xの視覚情報は私の前にあるディスプレイに、
聴覚情報は横に設置されたスピーカーに出力される。肉体
と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するX
の感覚を受け取ること、私たちは『異界』を知る。
かくして、今日の『潜航』が、始まる。

「興味深い体験でした」

「それはそうでしょうね。こちらは気が気
じゃなかったけど」

「心配を、おかけしました」

「ばらばらの間も意識はあったのよね？
どのような感覚だったのかしら」

「確かに、意識は、ありました。ばらばら
になった自分も、視認していました。た
だ、見ていたことは記憶していますが、思
考は、ほとんど、働いていなかったように
思います。形が戻ってきて初めて、自分の
状態を、正しく把握できてきた、ような」
「と、いうことは、形が分解されているよ
うに見えていたけれど、実際は意識が分解
されていた、あるいは『異界』で言われて
いた通り、あなたの『存在』そのものを分
解していたのかもしれないわね……」

「痛みや苦しみは全くありません。ばらば
らになった瞬間の感覚は皆無ですが、組み
立てが進むにつれ、妙に頭がすっきりし
て、体が軽くなるような感覚がありました」
「今も、その感覚は残っているのかしら」
「はい。いつになく、心身が軽い感じがし
ます」

「まさしく、『異界』のリラクゼーションね」
「いつか、あの『異界』を訪れる機会が来
たら、是非、試してみたいと思います」
「確かに効果的な宣伝だわ。あなたに『是
非』とまで言わせるもの、今までの『異界』
にもなかなかなかったもの。……ただ」
「ただ？」
「仮にその時が来たとしても、ちょっと、
いえ、かなり、勇気がいるけれど」
「その気持ちは、理解はします」

なんでもない日のXと私

2025-05-23 / ペーパーウェル 14「欠片」参加作品

シアワセモノマニア
<https://happymonomania.com/>

青波零也 Aonami Reiya
aonami@happymonomania.com
X(旧 Twitter): @aonami



無名夜行

Proof of Alice's Existence

デフラグメンテーション

「こんにちは、旅の方。我が社が誇る癒しの時間を体験してみませんか？」

そんな胡散臭い呼びかけに、しかしXは律儀に足を止めた。『異界』の事物を可能な限り観測せよ、というタスクを愚直にこなすXは、もちろんかけられた声を無視することはない。

声をかけてきた白衣姿の人物は、どうもXがこの『異界』の外側からやってきたことを把握しているようで、彼らにとつて別世界の存在は、そう珍しくないものとみえた。

そして、Xに「最新の休息施設」を体験してもらいたいのだという。忙しく働くあなたのた

めに、短時間かつお手軽に心身をすっきりさせましょう、という宣伝文句なのとか。

見ての通り金銭などの対価となるものは全く持ち合わせていないのですが、と、ズボンのポケットをわざわざひっくり返してみせるXに、白衣の人物は快活に笑ってみせた。

「対価など必要ありません、強いて言えばあなたの体験が未来のお客様への宣伝という対価になるでしょうか。例えば、あなたの目を通してこちらを覗いている皆々様とか、ね？」

かくして、白衣の人物に案内されたXは、つるりとした白いカプセルの前に立つ。

いようがなかった。体を構成しているパーツのひとつひとつが指先一つほどのサイズの立方体に分解され、そうしてできあがった無数の欠片がふわふわと虚空に浮いているのだった。

どの欠片がどのパーツを構成していたのかも、もはや定かではない。ただ、肌色だったり、茶色だったり、黒っぽかったりと、元のパーツの色を反映しているような気はする。割合の多めな渋いモスグリーンは、今日のトレーナーの色か。肉体だけではなく、着ていた服ごと分解されている、というのが何とも奇妙な感じではある。

それを言ったら、もはや目に当たる箇所もなく、目から入力

が、説明を始める。

「長らく使用してきた心身は、不要な要素を多く取り込んでいるものです。それらは、身体や心の不調を引き起こすだけでなく、あなたという存在を必要以上に摩耗させます。その前に、一旦あなたの存在そのものを見直し、不要なものを取り除いて組み直すことが肝心です」

意味を全て理解できるわけではない。あくまでXの耳にこう聞こえている、というだけで、この『異界』においてこれらの言葉が『こちら側』と同じ意味を持っているとも限らない。

ただ、ふと、デフラグ、とい

される刺激を視覚として処理する脳だつてすっかり分解されてしまっているはずなのに、鏡に映っているXの姿が今もなお

デイスブレイに投影され続けているのも奇妙ではあった。どう見ても異常な事態に、Xの意識体の引き上げも考えた、が、この状態で『こちら側』に引き上げて、正しく肉体に意識を収めることができるのか。この欠片一つでも不足すれば、Xが正しくXとして機能しなくなるのではないか？

あまりにも想像を絶する事態が発生すると、人は思考が停止するものだ。引き上げるのか否か、その判断すらまともに行えない私をよそに、デイスブレイ

う言葉が頭に浮かぶ。

コンピュータのハードディスクドライブでは、断片化

という現象が起こる。記憶領域内において、ひとつのデータがばらばらに点在する状態のことだ。このような状態に陥った場合、単一のデータであっても複数箇所を参照する必要があるため、その分ファイルアクセスが遅くなり、また物理的にも余分な動作が発生するため摩耗が進行する、というものだ。

これを解消するのがデフラグメンテーション、通称デフラグと呼ばれる処理だ。記憶領域の中で、データと空き容量を連続

すると、傍目には継ぎ目ひとつないように見えたカプセルの一部が横にスライドし、その中身をXに見せる。

表面と同じくつるりとした内側に、壁が突き出して座面となった椅子が一つ。椅子の前には人の背丈ほどの鏡が一つ。

「さあ、どうぞお入りください」

どこからか親しげな声が呼びかけてくる。Xはべたべたとカプセルの壁面の感触を確かめながら、椅子に腰掛ける。

鏡に映るのは、髪を短く刈った冴えない面構えの男性、つまりX自身の姿だ。

Xはしばしきよるきよると辺りを見渡していたが、やがて入

の中の際はらばらになったXには、さらなる変化が現れていた。無軌道に漂っているように見えた欠片のうち、一部が突然意思を持ったかのように動き始めたのだ。一つの欠片が本来頭の

頂点があつたはずの場所に静止し、次々とそこに他の欠片が集まり、断面と断面が結びついて大きな欠片へと変じていく。その動きはどんどん加速してい

いき、短く刈った白髪交じりの髪を持つ頭、両目でちぐはぐな色をした目、取り立てて特徴のない鼻と口を形作り、無精髭の浮く顎の先まで組み立てられたかと思うと、太い首から肩にかけてのラインを描き、ばらばらだった欠片たちが瞬きのうちに

的に再配置することで、断片化されていたデータを一つにまとめるというもの。

『異界』の事象を『こちら側』

の知識にことさら当てはめようとするのはナンセンス。異界研究者の鉄則ではあるが、しかし、Xに起こった事象はあまりにも不可解にすぎて、つい、何とか自分の中に納得できる説明を求めたくなってしまう。そういう心の働きを、誰が否定できるというのか。

「いかがでしたか？」

なおも呆然としていたXに、語りかけてくる、姿なき声。それでやっと我に返ったのか、X

口が閉まり、狭いカプセルの中にXひとり閉じ込められる形になる。上を見ても下を見ても照明らしきものは見えないが、壁面そのものが発光しているのか、壁とXを映す鏡はXの視界を通してはつきりとデイスブレイ越しに見て取れる。

「全身の力を抜いてください。深呼吸をしましょう。息を吸って、吐いて――」

どこからか聞こえる声のおおりに、Xが深く息を吸って、吐く音がスズビーカー越しに聞こえてきて。

次の瞬間、鏡に映ったXの姿が、ばらばらになった。としか言

Xの姿を形作っていた。

サンダル足先までがすっかり形を取り戻したところで、鏡の中のXがぱちぱちと瞬きをして、視線を己の両手に落とす。問題なくその指先が動くことを確かめるように、握って開いてを繰り返す。

ばらばらになって、元に戻った。言ってしまうとただそれだけなのだが、あまりにも衝撃的な現象だった。実際にそれを「経験した」Xは尚更のはずだ。

「体験いただいたのは、今までの形を一旦忘れていただき、あなたの本来あるべき形に組み直す、というプログラムです」

呆然としているXに向けて、自信に満ちあふれた姿なき声

は二、三度瞬きをする。一度分解されて再構成される、という経験など、そうそうできるものではない。

今のXは、一体どのような気分なのだろう。思わず固唾を飲んで答えを待ってしまう私に対し、わずかに視線をあげたXの回答は、

「とても、すっきりしました」

それはもう、いたって、簡素なものだった。

Xがそれでいいなら問題ない、と言うべきなのか？ どれだけ頭を捻ったところで、何が妥当かなど、私にわかりようもないのだが。